

決意も新たに 第11回農林漁業祭など開く



第十一回県農林漁業祭と第十三回県農業コンクール大会が、さる二月二十日、関係者およそ九百人を集めて県庁で開かれ、功労者の表彰、「日本農業の進路」と題する講演などが行なわれました。

ことしの農業コンクールをみてみますと、とくに企業の農家の増加、農業経営主の若返りなど、これからの熊本の農業を支えていく若い力の台頭が目立ち、きびしい環境にある農業にとって明るい材料となっています。

目立つ若い力の台頭

熊本県農業の振興は 県民の一致協力

佐藤 明雄
(矢部町農協協長)

熊本県農業の新時代を拓く為に、熊本

家の小屋に眠る機械貧乏の愚から脱却すべきであると思えます。農業機械を始め、その格納施設、大型ハウス、畜産等の生産施設や農畜産物の集出荷あるいは加工施設等、共同利用を前提とした国及び県の補助事業は盛沢山に準備してあると聞きます。今や個人経営の時代は去ったのです。生産者グループで知恵を絞り制度を十分に利用し、体質を強化すべきと思えます。

問題は生産と消費の見通しを適確にお願いしたい事です。米は政府が買上げる為、休耕奨励金というお金を出して政府自ら生産調整という措置を講じました。転作の助成金も出しました。冒頭に述べた果樹、畜産物等は国際的視野に立った見通しが必要であり、野菜等は国内消費の見通しを十分に立ててもらい、我々も生産見通しの基礎数字を握る責任者として自覚し、流通機構を整備し、生産者も消費者も共に納得のいく価格で喜び合える明るい、文化水準の高い農業県熊本の将来に希望を燃やし、努力し実現させたいものであります。

県農業計画が見事に出来上がった。

この計画は、昭和四十四年を基準年次とし、昭和五十二年を目標に、自立経営農家の必要農産所得を、四十四年百二十五万円、五十二年で二百万円へ、又志向農家の必要農産所得は四十四年七十五万円、五十二年で百二十万円と言う目標がたてられている。

本計画樹立に際しては県を中心に、各市町村、農業委員会、農協その他団体と話し合いが行なわれ、広く県民の意見を取入れられた事に対しては、将来ともに本計画が十分に生かされ実を結ぶ事を願って作成された事であり、本計画が具現実行の為の熱意と誠意が充分盛り込まれているのである。

今日の農業は世界の農業に連ると言われているその通りだ、しかし熊本県農業は世界に一つしかない、我が熊本県農業はわれわれ県民の手で作らねばならない決意で、本計画遂行に県民一致協力、一大運動を起こすのが本県農業振興の道であると考えよう。

今日の激動する経済の中で農業の近代化も当然の事であるが、経済的ならえ方ばかりで農業を見る事は、むしろ危険であり、農政不信の根源もこのあたりにあると思う。

GNP世界第二位に日本国民全部が振り回されている。時には学者や政治家が食糧は外国から安いものも輸入すればよいと真面目に言っている。

どこの国も国民食糧は自給自足出来る様最大の努力をしているのである。

県計画の中に、わが熊本県を国民食糧の安定的供給基準にする事を明瞭にして居る事は、農業振興の基本だと思ふ。更に農業従事者は、近代的な農業生産、豊かな生産の場と共に、県民に緑と清浄な空気、又憩いの場としての環境改善を図ると、これ又明示されているのも農業と言う仕事に生きがいを見出す基本であり、農業者以外の方々の農業に対する理解と都市生活者のために自然を守る事で、これ又県農業振興不可欠の問題だと思ふ。

農業がいつの時代も社会的、経済的にも恵まれない長い歴史の中で痛めつけられ、そして今日の農政不信、不安は依然根強いものがある。そして今日の精神面啓発が難しい時代ではあるが、農業とは何か原点に立って考えねばならぬ時が来た。今日公害、自然破壊、人間自らが住めぬ様に、又人命を養う食糧が人間の生命を縮めている今日、農業の本質を直視し、農業に取組む新しい農民教育こそ明日への農業振興の基礎でなければならぬ。

今日食糧不足は世界的な問題であるとするならば、食料品生産をする農業は成長産業である。そして食品公害のない消費者の安心して食べられる健康な食品を作る農業を先取りする熱意と研究が、熊本県農業の新しい方向としてこれが一大

運動を展開する事は、今日的課題として重要視されねばならぬと考える。

次に現在農家後継者の嫁働は深刻である。更に後継者の離村、その原因は何であろうか創造性に行動力に富むこれら現代青年が、農村に残らぬのは経済的問題よりも、封建的な農村社会にあると思う。孤立閉鎖的な社会生活を掃き、豊かな明るい農村社会を作り上げる運動を展開すべきだ。この責任は農協にあると思う。農協の最終目的は、明るい農村社会の建設にあるからである。

取った金をもっと大切に使う運動を農協運動として県全体の中で考えてやるべきだと思ふ。農業をやるより出稼ぎに行ってきたが、という考えでは農業振興どころか、かえって農業の前進をはむこととなる場合が多いからである。

私は農協運動者の立場から本県農業の振興はこの熊本県農業計画と、県農協がさきに決議した「五〇年代の生活と農業」と言う熊本県農業の基本構想を打出している、すなわち「人間として価値ある生活の創造を」「協同組合主義」を通じて達成する様努力する事より他ないと確信するのである。

又、宮崎県の「サツパ運動」もよい参考となるであろう、願わくば県知事を先頭に農業団体一体となり「新熊本農業振興運動」―仮称―を県民運動として展開されん事を提唱するものである。

ミカン戦争に勝利を

第二十三回県果樹大会は、みかん価格の暴落、オレンジの自由化などきびしい条件の中で、三月九日熊本市民会館に生産者などおよそ二千人が集まって開かれました。

果樹共進会入賞者の表彰、功労者に対する感謝状贈呈などのあと①ミカン戦争時代に勝ち残る産地体制の強化②国・県に対する果樹農業政策の強化③果樹振興特別増資運動の継続と加工施設の整備拡充の三議案を議決し、最後に、「品質向上対策、経営流通の合理化、加工工場の充実などを図り、ミカン戦争に勝ち抜く体制に取り組もう」と大会宣言しました。

熊本県野菜振興大会が、三月五日県庁で開かれ、関係者およそ八百人が出席しました。

大会では品評会の入賞者や功労者の表彰のあと、①施設化促進のための助成と長期低利融資制度の拡充 ②基盤整備の促進 ③新技術の開発 ④卸売市場整備計画の早期実現 ⑤輸送力の確保と改善 ⑥標準価格制度の確立 ⑦試験研究機関の充実と技術者の養成、⑧廃ビニール類の処理施設の設置に対する指導援助などを決議し、「集団産地体制を確立し、野菜共販百六十億円を突破しよう」という大会宣言を採択しました。

野菜集団産地の 確立めざす

